

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	班 婷
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">中国の国語科近代化過程における日本の影響 —清末民国前期を中心に—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教授	鈴木	理 恵
審査委員	教授	深 澤	広 明
審査委員	教授	田 中	宏 幸
審査委員	教授	金 子	肇 （文学研究科）
〔論文審査の要旨〕			
<p>中国は、日清戦争後に日本を範にとって教育の近代化を進めた。国語科教育についても、日本に倣って、1904年に独立教科が設置され、1920年に国文科から口語体教育へと転換した。後者は同時に、文語体による伝統教育から口語体による国民教育への転換を意味し、中国教育史上画期的なできごとであった。本論文は、中国の国語科が近代化を遂げる過程において、日本の国語科教育から受けた影響について、小学校段階に焦点を当てて実証的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文は序章、本論五章、終章から構成される。中国の国語科の近代化過程で日本から受けた影響について、カリキュラム（第二章）、教科書（第三章）、教授書（第四章）、国語教育意識（第五章）の面から検討している。</p> <p>序章「研究の目的及び構成」では、研究目的と先行研究の整理をもとに、本研究の課題を三点にわたり設定している。課題の第一は日本の教育に対する中国の受容姿勢及びその変化、第二は漢字文化圏としての日本との共通性が教育を受容するに際してどのように機能したかという点、第三は中国における国文教育から国語教育への転換に日本の教育が果たした役割についてである。</p> <p>第一章「『日本モデル』の選択背景」では、先行研究をもとに、中国が清末期に「日本モデル」を選択した背景や日本に学んだルートが整理された。また、日本に学ぶルートについて、日本留学、対日教育視察、日本人教習・顧問の招聘という、従来から知られる三つのルートのほかに、留学・視察未経験者が日本の書籍を翻訳・整理するという間接的なルートがあったことを明らかにした。</p> <p>第二章「小学堂カリキュラムにおける国語教育の実現」では、中国が日本の国語科カリキュラムを受容した姿勢について、時期による変化があったことを指摘する。すなわち、清末期においては学制の制定者が伝統的な儒教教育を守ろうとして日本の国語科カリキュラムを部分的に取り入れたのに対し、民国初期になると日本の規定をほぼそのまま導入したとする。しかし、これは盲目的な模倣ではなく、むしろ中国は主体的に受容したのであって、この国語科カリキュラムは中国の国語教育の制度的基盤となったと評価する。</p>			

第三章「近代国文・国語教科書と日本」では、国文教科書における日本の教育の受容姿勢と受容状況について検討している。受容姿勢については、清末期に『最新初等小学国文教科書』を編集する際に、日本の教科書編集経験に頼った面があったものの、中国の文字や文化についての配慮もみられたことを指摘した。民国期に入ってから、各国の編集経験を総合的に参照するようになり、自主的姿勢がより強くなったとしている。受容状況については、日本と同じ漢字文化圏であることが、『最新初等小学国文教科書』の編集に際して有効に機能したとする。

第四章「教授法における日本の影響」では、教授法の場合も、清末期には日本の教育に対して自主的受容姿勢が見られたが、民国期になるとさらに各国から教育情報を収集し、自国の教育実情に適したものを選択するようになったと指摘する。

第五章「知識人の国語教育意識及びその変遷」では、中国知識人の国語教育意識（全国統一した言語の教育の重要性に対する認識）に対する日本の影響について検討している。清末期に知識人たちが日本の国語教育を取り入れる際、口語体教育ではなく従来为国文教育を維持しようとした。民国期になると、日本の国語科教育の目標や教授法が中国に取り入れられたことにより、中国の国文科教育関係者が国語教育の重要性を認識し、口語体教育の経験を蓄積するのに役割を果たしたとしている。

終章「総合考察及び今後の課題」では、序章において設定した研究課題に対する結論を以下のように整理することで成果がまとめられた。第一に、中国は、日本のカリキュラム・教科書・教授法などを、批判的検討のうえ取捨選択して取り入れたが、民国期になるとさらにその自主性が強くなる傾向があった。第二に、中国は、日本と同じ文化的・文字的基盤を有したがゆえに、日本の国語教育を比較的スムーズに導入できた。第三に、中国は、日本の国語科カリキュラムを導入することで制度的基盤を築き、日本に倣って口語体に近い文語体で教科書を編集し、日本の国語科の教育目標や教授法を導入することで国文科教育関係者の国語教育意識を高めることができた。以上のような成果のいっぽうで、学校現場における国語科教育の実態に関する検討が不十分であり、今後の課題として残された。

本論文の高く評価できる点は以下の三点にまとめられる。

1. 中国と日本の諸機関に所蔵される日記・教科書・教育雑誌などを収集し、それらの史料を精緻に分析して実証的に研究がなされた。中国語と日本語の両方に精通した著者ならではの研究といえる。
2. 従来の日中教育交流史研究では、学制の制定過程や、留学生・視察員・日本人教習などの視点から研究がなされており、教科教育のレベルまで深められてこなかった。本研究は国語科に注目して、カリキュラム・教科書・教授法などの観点から影響関係を明らかにすることによって、日中教育交流史研究を具体化・深化することに貢献した。
3. 中国の近代国語科教育史に関する従来の研究は、視点が国内に留まっていたが、本論文は日本の影響という視点から先行研究の不備を補った。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 28年 2月 9日

